

2019年度文系チャレンジ講座（第4回）を実施しました

8月28日（水）に教育学部の田中修二先生を講師に迎え、「美術（アート）と環境」というテーマで、文系チャレンジ講座の第4回を実施しました。遠隔配信した中津南、安心院、別府翔青、大分西、大分商業、大分雄城台、大分鶴崎、臼杵、三重総合の9校152名が受講しました。

先生はまず、環境とは対象物（例えばヒト）と「相互作用を及ぼし合うもの」（『広辞苑』第六版）であるという言葉の意味を確認され、授業に入っていました。

最初の話題は「アートの環境」ということで、アートの歴史とその環境についてお話しされました。その中でアートの歴史は75,000年前に遡ることができること、イタリア・ルネサンスの時代に今日のアートの概念が誕生したこと、20世紀に入り表現することや見ることそのものへの問いかけから様々に変貌を遂げ、環境（世情）を反映したピカソの「ゲルニカ」といった作品が生まれたことや美術館という展示環境が余分な装飾を排除し白を基調とした「ホワイト・キューブ」へと変化したというお話をされました。



次に先生は、環境問題の歴史とアートとの関わりについて取り上げられました。その中で公害の歴史や大気汚染そして気候変動のお話をされるとともにアートの経年劣化という課題について話されました。加えて、先生が取り組まれておられる屋外彫刻の保存修復活動について触れられました。

そして3つ目の話題として、環境とアートの関係ということで、環境に積極的に結びつくアートについて、「美術館」から離れる表現であるランド・アートやアース・ワークと呼ばれるいくつかの作品を紹介されながらお話してくださいました。社会環境や自然環境への関心の高まりとともに変化するアートについて触れながら、アートと環境がどのように相互に作用を及ぼしながら歴史を刻んできたのかというお話でした。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（98%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（99%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（95%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（91%）、「映像はよく見えた」（100%）という結果が出ました。受講生から「地元アートに取り組んでみたい」などの感想が寄せられました。

屋外彫刻の保存修復



修復前



修復後